

図書館だより

目 次

「顔の点検」…………… 1	看護学科資料コーナーの新設と二次
愛大図書館の現状と課題—その2—	資料および図書の移動について……………10
図書館資料の整備と予算制度の	目録システム地域目録講習会を開催……………11
在り方について…………… 2～5	学内ネットワーク(EUNET)による
「松高文庫」への寄贈図書 その2 …… 5～6	OPACのサービス開始……………11
統計からみた図書館資料…………… 7～8	愛媛大学記念文庫……………12
平成6年度大学図書館職員長期研修に	自己紹介…………… 9～10
参加して—坊っちゃんの東方見聞録— …… 8～9	図書館日誌他……………12

「顔」の点検

三木吉治

「男は40歳を過ぎたら、自分の顔に責任をもちなさい」と良く母から聞かされました。つまり、子供の時の顔は上下半分づつが両親からの遺伝情報そのものであり、子供の顔の善し悪しは親の責任ということですが、成人するにつれ、社会人としての経験と自信を積み重ねて行くことにより、自然と顔も立派になって来ることを意味しています。40歳を過ぎても自分の顔が気に入らない時は、これまでの自分を反省せよという事でしょうか。但し、女性についてはわかりません。

さて、図書館は人類文化遺産の総合的集積地であり、人類文化を教育・研究することを課題にしている大学にとってはその中心です。大学を見学に来たり、審査にきたりした方たちが先ず最初に訪問するのが図書館であるのも、そのためです。その意味から「図書館は大学の顔」と言えるでしょう。「大学の顔」としての図書館は、地域と大学との接点でもあります。本学でも図書館は城北キャンパスの

中央で、正門から入った目抜き通りに面しており、周辺部も最も整備されています。しかも、本学は創立以来、丁度45年ということで、その意味で「大人になった図書館」と考えて良いでしょう。「大人の顔」としての図書館には大学自体が責任をもたねばならないこととなります。

本学の図書館は「どんな顔」をしているのでしょうか。創立以来45年も経つと、収蔵図書数だけは膨大になりますが、図書数だけでなく、建物の整備、館内資料の整備・整理状況、利用者に対するサービスの善し悪し、利用のし易さ、利用率、館内の雰囲気など、「大学の顔」としての図書館の点検箇所は沢山あります。一度、ご自分で点検してみませんか。ただし、45年もかけて築き上げた「顔」ですから、そのことを頭にいれてお願いします。

(みきよしはる 学長)

愛大図書館の現状と課題 ～その2～

図書館資料の整備と予算制度の在り方について

阿部 雅 機

はじめに

今回は各種の資料を配置・収容し、サービスを展開する情報発信基地としての図書館の、施設・設備の現状と課題について述べた。

今号では、本学における図書館資料の現状と、その整備・充実のための予算制度の在り方について考えてみたい。

学生用図書の実践のために

本学に赴任するための事務引継の日、初めて閲覧室を見て大変驚いた。書架があまりにも閑散としていたからである。前任の大学とは学部数は同じだが、学生数や大学全体の蔵書数では愛媛大学の方がかなり多いはずなのに、なぜだろうという疑問が頭から離れなかった。

赴任後さっそく調べてみたら、閲覧室に出ている開架図書数は7万冊弱で、前任地の約3分の1であり、城北地区の蔵書に占める開架率は9%以下であった。私が受けた強い衝撃は、残念ながらこれらの数値によって裏づけられることになった。

なぜ書架上に本が少ないのかサービス部門の職員に尋ねてみたら、閲覧室の床の荷重が心配で、図書の一部を書庫内に移動したとのことであった。荷重が心配であれば施設部に確認すれば良く、書庫への入庫資格は原則として4回生以上としているため、書庫へ移動した資料も大部分の学生にとっては自由には使えない。そのうえ、魅力ある視聴覚資料やそれを利用するための機器もほとんどなかった。おまけにわずかではあるが、後援会費の一部として入学時に図書費をいただいている。よくこれで学生が文句をいわないなあ、これらの状況を早く何とかしなくちゃというのが、当時の偽らざる心境であった。

本が少ない第二の理由が、予算不足であろうことは容易に想定できたが、学内共通経費

にかかるヒアリングの際に、逆に学生用の図書整備について心配し、意見を提示された程であった。

基礎調査を開始する

その日から、図書館における新たな取り組みが始まった。当時の池田忠生館長及び事務部長と相談し、学生用図書の整備を進めるために、まず資料づくりから始めることにした。

調査の基礎資料としたのが、第一に文部省学術国際局学術情報課で発行している「大学図書館実態調査結果報告平成3年度版」であり、これによって本学と同規模の大学(Bクラス=学部数5～7)の平均値との比較を試みた。この「結果報告」からは、以下の事項についてデータを得た。

a 全蔵書数 b 学生1人当たりの蔵書数
c 学生1人当たりの年間受入冊数 d 年間図書受入冊数 e うち購入冊数 f 全所蔵雑誌種類数 g 学生1人当たりの雑誌種類数 h 年間雑誌受入種類数 i うち購入種類数 j 視聴覚資料種類数 k 視聴覚機器所有数 l 全学の資料費 m 学生1人当たりの資料購入費 n うち図書館備付分 o 全学の資料費のうち文部省配分以外の予算 p 全学の資料費のうち図書館備付分 q 開架図書率 r 参考図書冊数 s 指定図書冊数 t 年間貸出冊数 u 図書館運営費、v うち学内措置分

このうちa, c, d, e, h, i, l, m, o, uの各事項については、本学の数値が優っていた。また、b, f, g, の各事項については、本学が数値的に若干劣っていた。これらの大部分は、大学の規模(教官数, 学生数, あるいはそれに基づいて配分される予算額等)という観点から説明でき、ほぼ妥当な数値であろうと考えられる。

問題なのは、そのうち図書館に関する数値が明確に抽出できる事項についてである。例

えば、j (視聴覚資料種類数)では、本学は同規模大学平均値の5.6%しか所有していない。同様にk (視聴覚機器所有数)では51.6%、q (開架図書率)では39.5%、r (参考図書冊数)では56.3%、t (年間貸出冊数)では76.1%、v (図書館運営費のうち学内措置分)では58.4%であり、S (指定図書冊数)については、本学では指定図書制度を実施していないため0%である。

これらのことから、本学では、特に学生用資料の整備がかなり遅れていることが裏づけられた。

次に、全国の大学図書館が学術情報センターに登録した和書のうち、本学が購入している比率について、昭和62(1987)年から平成3(1991)年の5年分を調査した。分野別に見ると平成3年分では、総記24.7%、自然科学14.7%、技術11.1%、芸術8%、哲学6.4%、社会科学6.1%、文学5.2%、語学4.7%、産業3%、歴史1.8%で、新刊書の少ない本学図書館の特徴が明らかになった。

また、これとは別に、平成3年度に館外貸出された図書のうち上位100点について調査した結果、分野別の貸出状況は、1位自然科学53%、2位工学34%、3位社会科学7%等となっているが、補修済みの図書及び補修を必要としている図書が目立った。これは副本が少ないために、同一の図書が繰り返し貸し出されることによって痛んだものと考えられる。

なお、参考図書については、「日本の参考図書～四季版」の1991年分と本学における購入状況を比較してみると、文学56.1%、自然科学42.3%、総記41.1%あたりが高いが、語学21%、技術19.7%、産業8.9%と充足率が低く、全体では36.8%にとどまった。参考図書は研究・教育活動の別を問わず、調査のための必須の資料であるだけに、基本的なものはどうしても整備する必要があるのだが…。

最後の調査が、図書館に対する学内援助状況の照会である。いずれも国立大学であるが、規模は異なっている。また、調査年度も同一ではない。()内は入学定員を示す。

● A大学：教官当校費の3.5% = 11,200万円

(学部 2,030 院 958)

- B大学：学生当校費の20% = 6,800万円(学部 1,440 院 150)
- C大学：(教官 + 学生当校費)の0.7% + 教養部学生当校費 = 4,500万円(学部 2,645 院 473)
- D大学：教官当校費の5% = 2,896万円(学部 1,030 院 71)
- E大学：教官当校費の0.5% + 学生当校費の13% = 2,568万円(学部 1,060 院 86)
- F大学：共通経費 + 学部分担 = 2,029万円(学部 2,833 院 825)
- G大学：共通経費 = 1,772万円(学部 2,103 院 378)
- H大学：学部分担 = 1,555万円(学部 2,225 院 482)

これに対して本学の状況について見ると、平成4年度の入学定員は学部1,878名 大学院261名であり、昭和53年度以来、全学共通経費から毎年900万円余を援助いただいていた。

この調査によって、本学より規模の小さな大学でも、図書館に対してかなりの学内措置を講じている大学があることがわかる。また各大学では、この経費によって、学生用図書、指定図書、学生用雑誌、基本的な参考図書を整備している大学が多く、中には視聴覚資料、共同利用学術雑誌、製本費等に充当しているところもあった。

この補助の差が、初めに上げた「実態調査」に現れたと考えられ、何も手をうたなければ、格差はますます広がることになる。図書館としては、毎年学生当積算校費から一定のパーセンテージを学生用図書整備に充当するという安定した予算システムの確立を望んでいる。

もちろん、これは理想的なカタチであり、その移行までの間は例えば共通経費の増額であっても良いと考えている。

学内の理解を願って

調査資料とそこから導かれた基本的な考え方については、附属図書館委員会に諮られ、全学的な見地から数次にわたって論議された。

図書館としては、学生用図書、留学生用資料、視聴覚資料、電子資料、基本的な参考図書等を整備するための財源は、学生当積算校費が適当であり、拠出率の最大値は10%を希望し、少なくとも5%相当額(平成4年度で約2,300万円余)程度は必要と考えた。

図書館では、附属図書館委員会その他の学内意見を踏まえた上で、さらに学内の理解を得るため、学生用図書の整備・充実を訴える「速報」をまとめ印刷・配布した。

さらにこの資料をもとに、前館長が学内各部署を廻り、熱心に図書館予算増額への理解と協力を求めた。

このような図書館側の努力を認めていただけたのかどうかは分からないが、平成5年度の共通経費では、学生用図書充実費として前年度のほぼ倍額の配分を受けることができた。これは学生当積算校費の約4%に相当する。

なにをどのように整備したか

この結果をただちに館長及び事務部長に報告し、今後の方針について検討した。文部省から直接配分される学生用図書購入費については、既に各学部の教官に選書をお願いしているので、学内配分経費では、これまで選書されなかった資料や、蔵書構成上偏っている分野を全学的な見地から図書館職員が選定することにした。

このため拡大図書収集事務委員会を開催して予算配分計画を立て、選書の方針を決めた。この結果、本館では、①文学、語学関係の全集物 ②特に利用が多いと考えられる新書、文庫本 ③不足している参考図書 ④視聴覚資料2セット ⑤CD-ROM4点のほか学生課と相談してアンケート調査を実施し、新たに ⑥留学生用の新聞・雑誌を10点購入することにした。

医学部分館では、①高額な医学全集 ②CD-ROM1点を購入し、農学部分館では、①不足している参考図書 ②視聴覚資料5セット ③CD-ROM3点のほか、④留学生の希望図書等を購入し、さらに⑤製本費の一部に充てることができた。これらは、増額がなければ実

現できなかっただけに、図書館にとっては大変ありがたい措置であった。

なお、平成6年度についても、学生用図書充実費として前年度と同額が配分される見通しである。

さらに図書館では、学内における予算措置を待つだけでなく、学外団体からの寄付についても努力している。また、本学の前身である旧制松山高等学校の同窓生に対して、その著書を寄贈していただけるようお願いし、既にかなりのご協力をいただいていることを併せて報告しておきたい。

今後の課題

最後に今後の課題であるが、その第一は、一日も早く学生用図書充実に向けて、安定した予算システムを確立することである。本学の教育活動を活発化し、学生の学習活動を助けるためには、米国の大学で見られるリザーブド・ブック・システムの導入等、留学生を含む学生のための各種資料の充実を図る必要がある。このためにも確固たる予算システムの定着が望まれるからである。

第二段階としては、学生用図書に次いで、研究用資料の充実を図ることである。既に医学部分館においては、主要な学術雑誌の共同利用を推進し、オンラインの情報検索サービスやCD-ROMによる検索等、第一線の専門図書館にふさわしい活動を呈している。

これに対して本館では、学習図書館機能や保存図書館機能が中心であり、最近CD-ROM等の整備に着手したものの共同利用学術雑誌も少なく、基本的な二次資料も乏しいなど、研究図書館機能を十分発揮していない。農学部分館も本館とほぼ同様の状況である。

さて、改善の一方策は、学内LANを介在したCD-ROMサーバによる検索システムを構築して、比較的全学共通で利用できると思われる化学、生物学、生命科学、主要分野の目次速報やその他の基本的なCD-ROMを搭載し、城北、樽味、重信の、どのキャンパスからでも検索できるようにすることである。

この第1次計画分は、平成7年度概算要求

事項に上げているが、ハード、ソフトの経費の問題が大きい。従って、学生用資料の充実を図るために、学生当積算校費からの援助を求めるのと同様に、研究用資料の充実を図るために、教官当積算校費からの援助を願うのは無理な考えであろうか。

このように、図書館の機能を十分に発揮するためには、財政的な課題を避けて通ることができない。よく「図書館は大学の心臓である」とか、「大学のシンボルである」とか言われるが、その大学のレベルは図書館を見ればわかるというもの、一つの真理であろう。

大学図書館は、現在の利用者に対してのみならず、さらに未来の利用者に対しても各種

資料の整備・充実の使命と責任を負っている。

図書館資料の充実は最終的に大学の使命である研究活動や教育活動に資するものであり、図書館はそれらの活動を支援する大学にとって不可欠の機関であると言えよう。

今後の愛媛大学の発展を願い、図書館職員は資料の整備・充実に日夜心をくだしている。図書館に対する全学的なご支援を心から願う所以である。

さて次号では、前回と今回で述べることでできなかった事項を取り上げ、本学図書館の現状と課題のまとめにしたい。(続く)

(あべ まさき 情報管理課長)

「松高文庫」への寄贈図書 その2

「図書館だより」第37号でお知らせした後に寄贈いただきました図書は下記のとおりです。(敬称略)

◎奈良本辰也(14回文科甲類)～続き～

楽天主義いまどう生きるか

志ありせば吉田松陰

風土の中の史実

人物を語る 激動期の群像

維新の詩

あ、東方の道なきか 評伝前原一誠

歴史のたてよこ

日本史の人間像

味雑事談

明治維新の東本願寺

城下町の旅

近世政道論

歴史と風景

二宮尊徳・大原幽学

◎新藤 正信(18回文科乙類)

土佐白瀧鉦山史の研究

◎増田 芳雄(29回理科3組)

植物の成長制御

生理・生化学用語辞典

細胞分画法

植物の細胞壁

忘れられた植物学者

モヤシはどこまで育つのか

植物生理学 [培風館]

発生

植物生化学

生物英語ハンドブック

植物生理学 [放送大学]

絵とき植物生理学入門

植物学史

植物の生理

図解生物学

生理・生化学用語辞典 [縮刷学生版]

植物ホルモン研究法

◎上田 朝一(28回理科2組)

光州学生事件ノート

いい文章が書ける本

ニュース加工の効果と限界

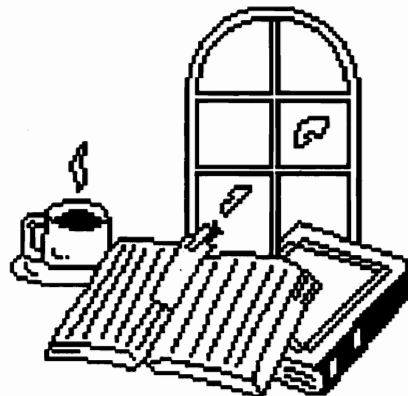
松山高校演劇部私史

報道への過信と誤解

◎古川 敏也(23回文科1組)

随想集幾山河越え去り行かば

- 随想集たそがれのプロムナード
- ◎友近 忠至(28回文科甲類)
コンピュータ・システムと経営管理
- ◎藤田 稔(29回理科1組)
若葉の古城—松山高等学校庭球部史—
石油分析化学
- ◎渡邊 昭二(26回理科3組)
燃料と環境
- ◎井上 良久(29回文科甲類)
ヨーロッパ紀行1988~1992
- ◎清水 克彦(25回文科2組)
京都女子大学本 源語花錦抄
京都女子大学本 源語花錦抄(翻刻)
柿本人麻呂
萬葉論集
" 第二
萬葉序説
山椒太夫読例
萬葉雜記帳
- ◎門田 圭三(14回文科甲類)
輝けわれらが青春の日々よ!
- ◎藤枝 章(21回文科甲類)
扇山忠男追悼文集
句集浄星 扇山彦星子
- ◎日野 檉祐(28回理科3組)
姉弟合同句集 はらから
- ◎池田 和夫(27回文科甲類)
如是我聞・光明主義入門
- ◎高橋 敷(30回理科4組)
みにくい日本人 [初版]
" [改訂版]
家庭の中の日本人
日本のママと世界のママ
日本の家庭世界の家庭
日本人とドイツ人
ドイツ家庭教育に学ぶもの
しつけを見直そう
はずかしい日本人
勉強ずきの子にする本
世界のサラリーマン
ママの勉強作戦
じぶんでみつけるりか
のびのびしつけ いきいきマナー
- 落ちこぼれが大人になったとき
[世界思想社]
落ちこぼれが大人になったとき
[生活と文化の会]
新しいしつけの本
子どもに困ったときの本
子育て相談室
自立への子育て
遊ぶ力・生きる力
ことばが変われば子どもが変わる
- ◎相賀 岩雄(24回文科2組)
倉庫入門
- ◎村上 光(30回理科2組)
随想秋の旅
随想冬の手紙
随想春の嵐
江戸古地図にみる大洲藩江戸藩邸について
- ◎向井 彬(14回理科乙類)
わたしの海軍時代—思い出の日々—
- ◎伊藤 恒夫(10回理科乙類)
大学の現実と理念(上)
" (下)
- ◎山田 秀(12回文科甲類)
入門信用調査
- ◎三好助三郎(教官：特別会員)
新独英比較文法



統計からみた図書館資料

前回には平成5年度の統計を数値で示したが、今回は過去5年間の統計を基に利用面を中心にグラフで表わした。

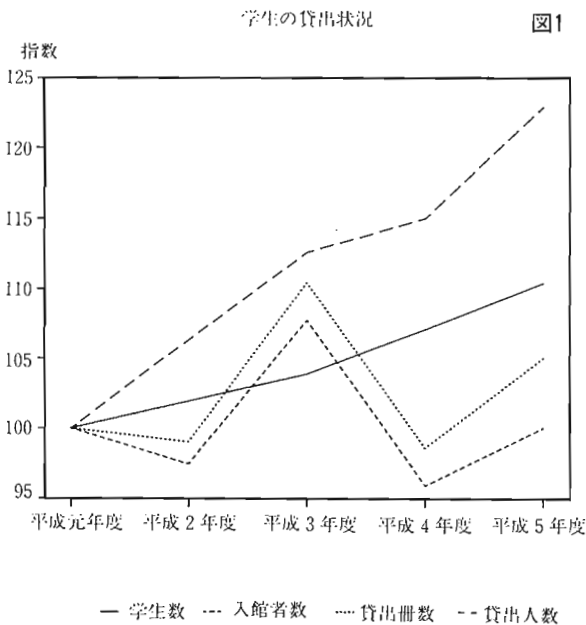
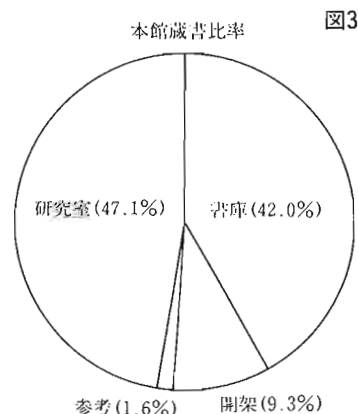
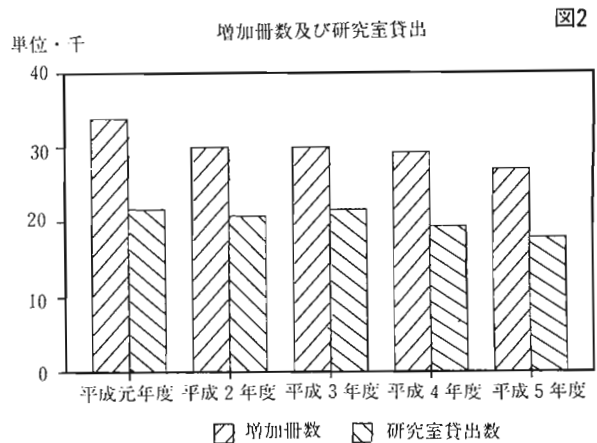


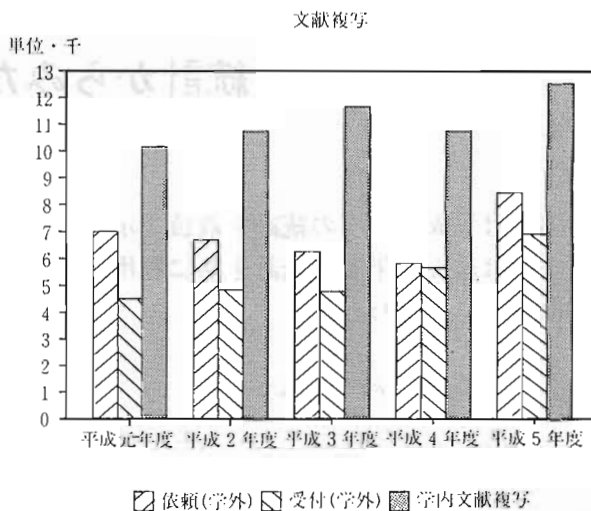
図1は学生数と入館者数、貸出冊数と貸出人数の状況を見たものである。入館者は学生数とほぼ同様の増加をしているのに対して、貸出冊数、人数とも平成4年度に降下している。これは週5日制に伴い、土曜日の開館日数・開館時間短縮と、学生の要望を入れて貸出期間を2週間に延長したことによるものと考えられるが、同じ条件での平成5年度では数値が伸びているのを見ると一概には言いきれない。平成3年度が急激に上昇しているのはBDS設置により入館時の煩わしさがなくなったせいであろう。いずれにしても、貸出冊数と人数が平行線であるのは1人が利用する冊数が変化していないからである。

次に本学の蔵書がどのように配置されているか、図2は両分館を含めた購入数に対する研究室貸出の割合であり、全体では65%前後で一定しているが、これが本館の場合だと

70%相当であり、時に75%を越すこともある。さらに平成5年度末の本館における全蔵書787,970冊の所蔵箇所別比率は図3のとおりで研究室所蔵は47%と購入冊数に対する貸出冊数の比率を随分下まわっている。このことから、本館では新しく購入した図書は大半が研究室に貸出され、古い図書が図書館に置かれている結果となり、入館者が伸びているほどには貸出冊数が伸びていないのは、学生の活字ばなれ以上に、読める本が図書館には少ないのかも知れない。また開架図書率9%というのも国立大学の中ではかなり低い位置にあるため、今後は学生の希望も十分考慮したい。幸いに昨年度から学内措置によって増額していただいた学生用図書費を有効に活用したい。



最後に図4で現物貸借、文献複写による相互利用を見ると、学外への依頼件数が年々減少し、学外からの申込受付件数及び学内の複写件数が増加している。平成5年度は学内の複写件数をはじめ、対学外の依頼・受付件数とも急増している。これは本学の資料の充実というよりも、機械化によって文献情報検索、所在情報検索が容易になったこと、また一方ではNACSIS-ILLの稼動により相互利用の申込方法が簡便になり、申込から入手までの期間が大幅に短縮されたことによると考えられる。(図3以外は両分館を含んだ合計での数である)



平成6年度大学図書館職員長期研修に参加して

—坊ちゃんの東方見聞録—

松本秀毅

平成6年7月18日から8月5日までの3週間、文部省および図書館情報大学共催による標記研修を受講させていただいた。

今回の研修生は北は北海道から南は鹿児島まで総勢45名、内訳は国立大学34名、国立機関4名、公私立大学7名であり男26名女19名であった。全体の感想としては大学における情報発信基地としての役割、地域においては生涯学習教育の支援体制の強化、また留学生に対するサービスの充実など、高度化、地域化、国際化に対応して図書館のサービスがどうあるべきか、何を目指すべきかいろいろ考えさせられる研修であった。

研修は講義が中心ではあるが、共同研究討議や演習、実習、施設見学など盛りだくさんで大学図書館のおかれている現状がいかにか広い範囲の課題を抱えているかを認識させられた。講義概要は要項にあるので省略するが、共同研究討議は4つの班にわかれ次のテーマについて討議した。

[第1班] 生涯学習社会に対応した図書館の公開、及び高度情報社会における図書館職員のあり方

[第2班] マルチメディアとネットワークを活用した情報提供サービスのあり方

[第3班] 今後の資料の収集・保存と図書館間の相互協力のあり方—資料の収集・保存・廃棄・保存図書館・ILL—

[第4班] NACSIS-CATの現状と課題—多様な資料の整理・書誌調整・遡及入力—

今回の研修でよく耳にしたキーワードは、マルチメディア、インターネット、ネットワーク、電子図書館、保存システム、ナビゲーションツール(Gopher, WWW, WAIS, Mosaic)などで、情報流通システムがコンピュータのダウンサイジング化により分散処理に移行していることや、ネットワークを通じてお互いの情報が速く、正確に、そして安く交換できるようその体制作りを目指しているのを感じた。ネットワークで大切なことは、他の機

関にアクセスする手段や窓口を提供することも必要ではあるが、各大学図書館がそれぞれの地域の中で独自性を持ち特色ある情報を構築し、さらに発信する機関になることではないだろうか。

研修の中で思ったことは、図書館とは業務でありながら専門性をもった学問の実践であるということである。図書館職員は日々図書館業務に携わる事務官でありながら図書館という専門性のある職場で知識や技能を修得することができる。そしてそれは図書館であれば国際的にも通用する専門性を持っているのである。個人として図書館の専門性を追求することと大学図書館という組織の目指すものとの調和がとれるなら図書館という職場がなお生き生きしてくるのではないだろうか。研修の目的の一つに「動機づけ」があげられるが、図書館に身をおく喜びをかみしめ業務に対して心意気を持ち続けたいと思う。

図書館システムの高度化、学術情報流通体制の整備の中で大学図書館の役割はますます重要になってきている。ただ忘れてならないのは図書館はサービス機関でありサービスの提供なくして存在意義はないということである。図書館が資料を収集し、整理し、保存するのも利用者に提供するためであり、提供サービスのための図書館業務でなければならない。情報を生かすために職員である私は、利用者の目を持って図書館の玄関に立ちたいと思う。

今年の夏は猛暑というより酷暑と言われたがまさに暑さとの戦いでもあった。特に見学が午前と午後にわかれた時は昼休みを利用した移動であり時間との戦いも加わってなお筆舌につくしがたい状況になった。だがこういう苦しさからかえって連帯感も増し、みんな和気あいあいと受講することができ、45名全員修了証書を手にした時のうれしさは格別のものであった。この長期研修は長い歴史と伝統を持ち研修後は同窓会が毎年開かれるようであるが、われわれも熊本大学の松藤氏を会長に集まることにしている。なお同窓会のニックネームが「暑かったね'94」を抑えて

「Mosaic '94」に決まったことはわれわれ6年度研修生のネットワークの強さと今後の情報化社会に対する意気込みを感じさせるものと自負している。

終わりにあたり、いろいろお世話になった図書館情報大学や各見学機関での皆様、熱心に講義していただいた講師の先生、またあたたかく研修に送り出していただいたわが愛する愛媛大学の皆様に心より感謝申し上げます。

(まつもと ひでき システム管理係長)

自己紹介

上山 朋子

(農学部分館情報サービス係)

平成5年12月から農学部分館で学内外の文献複写等の相互利用、参考調査、代行情報検索等を担当しています。

生まれも育ちも大阪市。京都の短大で絵画を学び、なぜか大学図書館に就職した変わり者です。平成4年の4月に大阪大学基礎工学部図書室から縁あって愛大図書館へ転任してきました。

以前の大学では理系の学部の図書室で、同じ様な仕事をしておりました。農学部は初めてですが見慣れた雑誌も多く、余り違和感無く仕事をしています。

農学特有の情報、文献等についてはまだまだ不勉強で、利用者の皆様にご不便をおかけしています。より高度なサービスができるよう、これから知識を広げてゆきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

農学部分館で唯一のロングヘアが私です。分館を利用される時に、解らない事等ありましたら、お気軽に声をかけて下さい。

自己紹介

宮部明日香

(情報管理課図書情報係)

去年の4月から、和書の分類・目録を担当しています。

休日になると、テレビを見て、音楽を聴い

て、マンガを読んで…と、一步も外に出なくなってしまう、ぐうたらな人間ですが、以前から、図書館で働きたいと思ってましたので、「伊予の小京都・大洲」から「花のお江戸」を通り越し、図書館情報大学に進みました。希望がかなってUターンし、愛媛大学で楽しく仕事をさせてもらっています。

もう、1年以上たったというのに、まだま

だ未熟者で、今までの勉強不足を痛感している毎日です。

どれくらい迷惑をかけた(かけている?)のかを考えると恐ろしくなっていますが、利用者の方々や、やさしく指導してくれる先輩方に、少しでも貢献できるように、がんばりたいと思っていますので、よろしくお願いします。

看護学科資料コーナーの新設と 二次資料および図書の移動について

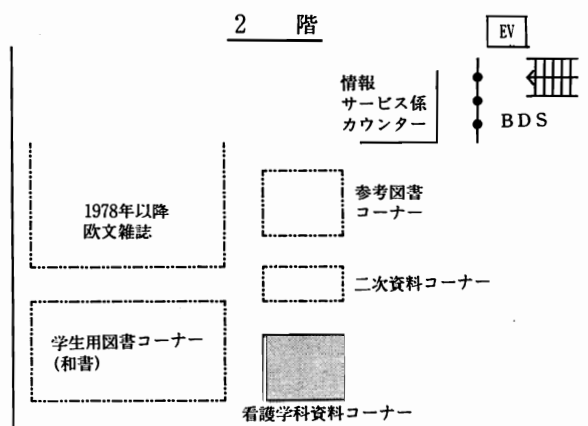
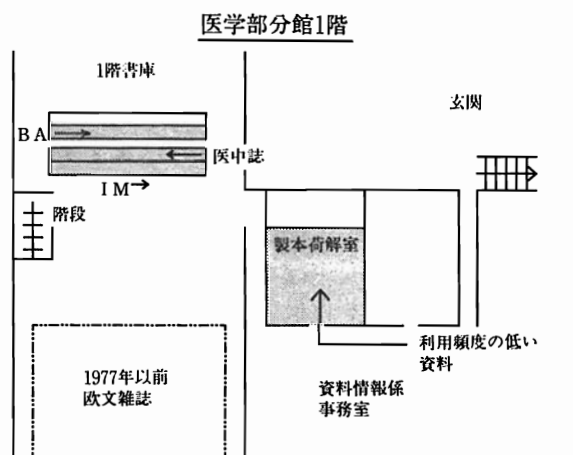
医学部分館情報サービス係

書庫の狭隘化対策と看護学科の資料コーナーを設けるため、史上最高の猛暑の中、女性ばかりになった係で汗だくになりながら、奮闘して資料の移動をしました。以下に移動した資料の配置をお知らせします。

2階閲覧室の二次資料コーナーに配架していた医学中央雑誌(1903-1990), Biological Abstracts(1972-1990), Index Medicus(1927-1990)を1階書庫に移動しました。1991年から現在までの二次資料は現位置に配架しています。また、1階書庫に配架していた利用頻度の低い資料, NDC(日本十進分類法)の類目表0(総記)~3(社会科学), 5(技術)~9類(文学)の和漢書を1階事務室(資料情報係)北側の製本荷解室へ移動しました。移動した図書の閲覧, 貸出については情報サービス係カウンターへ申し込んで下さい。

なお, これらの図書のうち医学関連分野(心理学, 学校保健, 社会福祉, スポーツ医学), 辞書等は学生用図書コーナー及び参考図書コーナーに配架しています。

新しく「看護学科資料コーナー」を2階学生用図書コーナー(和漢書)横に設けました。ここには新規に購入する看護学関係の資料を配架する予定です。移動した二次資料と図書, 新しく設けた看護学科資料コーナーの配置は右図のとおりです。



目録システム地域講習会を開催

7月4日(月)から8日(金)まで、昨年に引き続き「学術情報センター」との共催による目録システム地域講習会を開催しました。

この講習会は、目録業務担当職員にシステムの運用に関する知識・技術を修得させることを目的とするもので、本学職員5名及び学外の図書館員5名の計10名が受講しました。

大変暑い中、節電の為冷房が使用できない時間帯があり受講者は汗だくになりながら、熱心に課題に取り組み全員所定の過程を修了しました。



学内ネットワーク(EUNET)による OPACのサービス開始

図書館のOPAC (ONLINE PUBLIC ACCESS CATALOG)を学内ネットワーク経由で利用していただくため、下記のOPAC専用の利用者IDとパスワードを公開しますので、ご利用下さい。

現在接続の確認がとれているのは富士通の端末です。他の端末を接続した場合は文字化け等障害が起こることがありますが、これらの接続については、次号以降にお知らせします。

なお、公開した利用者IDによる利用時間は現在のところ1回につき10分間としています。

OPAC用公開ID及びパスワード

(城北地区)

TT00600	TT00601	TT00602
TT00603	TT00604	TT00605
TT00606	TT00607	TT00608
TT00609		

(重信地区)

TT00701	TT00702	TT00703
TT00704	TT00705	

(樽味地区)

TT00801	TT00802	TT00803
TT00804	TT00805	

パスワードは、どのIDでもOPACと設定しております。

愛媛大学記念文庫

平成6年4月1日から7月末までにご寄贈
いただいた著書は以下のとおりです。

(敬称略)

赤間 道夫

- 再生産論成立史研究序説(愛媛大学経済学
研究叢書7) 赤間道夫著 愛媛大学法
文学部経済学科 1994

安倍 惇

- 為替理論と内国為替の歴史(愛媛大学経済
学研究叢書4) 安倍惇著 愛媛大学法
文学部経済学科 1989

大原 純一

- 野菜流通の課題と農業協同組合(愛媛大学
経済学研究叢書3) 大原純一著 愛媛
大学法文学部経済学科 1988

小沼 大八

- 人間と文化の諸相 小沼大八著 創風社
1993

小林 漢二

- 河上肇(愛媛大学経済学研究叢書6) 小林
漢二著 愛媛大学法文学部経済学科
1992

古茂田淳三

- ねじのひねり他二篇 ヘンリー・ジェイム
ズ著 古茂田淳三訳 あぼろん社 1993

谷川 宗隆

- 蓄積論研究序説(愛媛大学経済学研究叢書
5) 谷川宗隆著 愛媛大学法文学部経
済学科 1991

長谷川 節

- 非常に誤りの多い高校物理教科書と間違っ
た大学入試問題 長谷川節著 近代文芸
社 1994

福井 康之

- 自己実現と共感 福井康之著 愛媛大学教
育学部心理学教室 1981
- 自己実現のための人格成熟促進ゲーム 福

井康之著 愛媛大学教育学部心理学教室
1983

- 自己実現の構造 福井康之著 愛媛大学教
育学部心理学教室 1980

- 自己実現の人間学 福井康之著 愛媛大学
教育学部心理学教室 1979

水野 信彦

- 河川生態環境工学 玉井信行, 水野信彦,
中村俊六編 東京大学出版会 1993

- 河川の生態学 水野信彦, 御勢久右衛門共
著 築地書館 1993

- 日本の川 水野信彦, 君塚芳輝著 草土社
1993

美山 靖

- 秋成の歴史小説とその周辺 美山靖著 清
文堂 1994

守屋 毅

- 近世芸能文化史の研究 守屋毅著 弘文堂
1992

矢野 達雄

- 近代日本の労働法と国家(愛媛大学法学会
叢書5) 矢野達雄著 成文堂 1993

理学部地球科学科

- 松尾秀邦教授退官記念論文集 松尾秀邦教
授退官記念事業会 1989

図書館日誌(会議, 研修)

6月10日 平成6年度第3回医学部分館図
書・情報委員会

6月15日 平成6年度第4回医学部分館図
書・情報委員会

6月23日 平成6年度第2回農学部分館運営
委員会

6月23日 国立大学図書館協議会総会
~24日 (静岡大学)

7月1日 愛媛地区大学図書館協議会総会

7月4日 目録システム地域講習会
~8日 (学術情報センター共催)